

研究発表 1

外国人子弟の言語教育（国際学校の場合）

国際学校とは

スギノ これからしばらくの間はインターナショナルスクールにおける言語教育についてお話をさせていただきたいと思います。国際学校というのは実は JCIS（日本インターナショナルスクール協議会）という協議会に加盟している学校のことです。特定の民族を対象とした民族学校とアメリカ軍附属の学校を区別しています。但し、24 校あるインターナショナルスクールの中にはアメリカンスクールとブリティッシュスクールが入っています。これは恐らく共通言語が英語であるということであるいろいろな学校活動が考慮されているからだと思います。

世界中のインターナショナルスクールでの共通言語はだいたい英語です。その学校の中では、生徒はどんな場面においても英語を使うように指導されているのが普通だと思います。特に日本のような状況ですと日本国籍を持って日本語を話す生徒が割合多いので、どうしても日本の中での言語教育、特に英語教育に関しましては「日本語を話さないルール」というのがどこの学校にもあると思います。それに対して罰則のある学校、またルールはあっても罰則のない学校、いろいろありますが、罰則の仕方については非常に気を配っているような状況です。学校の先生の数はだいたい 8,500 人という数字が出ておりますけれども、実はこれは去年の数字ですので、今は多少違っていると思います。

生徒の母国語認識

その中で調査しましたところ、1995 年のデータですが（表 ）、日本語の教育実態を調べる調査の時に母国語は何であるかというアンケートをとりました。その結果英語が母国語であると回答した生徒は 57.9%となっておりますが、この中を細かく見ますと、実は母語の認識についてはかなり主観的なものがありまして、普段自分が英語を使っていて、学校に来て人との会話も英語が多い、だから英語だと言う場合もあれば、例えばその他の言語でタイ語やヒンドゥー語、タガログ語辺りになりますと、今は使っていないけれども、自分はその言語を使うつもりで生まれたからそれを母語として残しておきたいという認識で、母語であると回答した生徒もいるようです。

アイデンティティ - の確立

国際学校で共通して言えることは、教育の理念がいろいろな国籍の生徒、あるいはいろいろな言語の生徒がおりますので、一つのものではなくて実は「個々の生徒のアイデンティティを確立する」ということと「個人個人の能力を伸ばす」ということが各学校の共通の理念だと言えるのではないかと思います。その中では当然いろいろな国の人が集まるわけですから、常に「異文化との交流を持つ」ということを奨励しております。

次に言語教育についてですけれども、これは先ほども申しましたように共通言語は英語ということになっておりますので、どの学校も英語には非常に大きな力を入れていると思

います。英語は、特に英国のことばだから、アメリカのことばだからということではなくて、アジア圏の国、あるいはその他の国の学校の生徒たちの共通語にあたるものが英語だからということとして、特にどの言語を優遇するとか、差別するということではない、ということに常に生徒にも言うようにしています。

徹底した補習体制

インターナショナルスクールに入ってくる生徒は世界のいろいろなところから来ますので、年中転入転出が絶えない、ということが一つの特徴だと思います。ですから英語の授業に限らずどの教科でも常に補習の体制を整えておかないと、生徒は非常に困難を覚えるということがあると思います。特に英語に関しては今はESLのクラスとして独立したクラスを持っていて、英語のクラスから生徒たちを抜き出して教えることはなるべく避けておいて、ある一定期間集中授業を行った後でできるだけ普通の授業に戻ってESLの教師がその授業と一緒に参加して困ったところがどこか手をかけるやり方の方が増えているようです。この場合英語を外国語として勉強する生徒だけではなくて、実は英語が母国語であるという生徒の中にも英語能力ということに関しましては、私たちが期待するようなレベルに達しない場合があります。そういう場合にも、同様に補習授業を行ったり、専門の英語の教師が授業と一緒にいたりということがあるようです。

外国語教育

その他国内のインターナショナルスクールではフランス語、スペイン語がだいたいどの学校でも教育されています。そしてもちろん日本語はどの学校でも授業があるように思います。但し、この日本語の位置については、外国語とする場合と全く独立させて日本語科というのがある場合と両方があるようです。まず、フランス語やスペイン語ですが、これはアメリカあるいはイギリスの大学に進学するときに、外国語科目として最もポピュラーなものがここで挙がっているということとして、地域によって、あるいは学校によってドイツの学生が増えたり、オランダの学生が増えたりという場合にはそのときどきにドイツ語あるいはオランダ語などのコースを設けて対応しているようです。どうしても大学への進学ということを考えざるを得ませんで、高校の卒業段階で一定のレベルに達していないといけないということで、だいたい本格的に外国語教育というのが始まるのは中等課程より上の段階だと思います。

日本語教育

次に日本語ですけれども、日本語はフランス語・スペイン語などとは違っていて、どの学校でも小学校から教えられていることが多いようです。日本語には既に日本語を話す生徒のためのクラスと全く日本語を外国語としてゼロからスタートするクラスと、大きく2つ挙げられるのですけれども、主な特色はまず日本語を話す生徒にとっては最初からかなりハードな学習を要求されるということがあります。といいますのは、どうしても日本語をうまく話す生徒にとっては将来も日本に残って生活するであろうということが予測されますので、日本の社会にあった表現、あるいは日本の社会の常識などを学ぶということで、検定教科書を使う場合が非常に多いということなのですけれども、それに対して外国語としての日本語の授業というのはどちらかといえば、体験的なもの、文化に親しむような生

活のものが多くて非常に楽しいという感じのクラスが多いようです。もちろんこれが中等教育になっていくと、進学のために必要な語学レベルということ意識しなくてはいけませんので、多少漢字が増えたり、あるいは作文が増えたりすることはありますけれども、今のところ小学校の3年から高校の3年までずっと同じ学校に居続けるという例はあまり沢山はないようです。

言語評価

言語評価については、2年前から新しく International Baccalau-reate の基準が設けられました。それまで言語を母国語あるいは外国語、それに対して第一言語、第二言語という呼び方をしていたのが、実は今回からは Language A1、A2、B、Ab initio という4つの分け方になりまして、なるべく native language とか、first language とか、mother tongue ということを避けるように考慮されています。A1 は文学のクラス、これは国語としての性格が高いものです。A2 になりますとこれはあくまでも言語のクラスで、国の社会情勢や言語との体験が豊富な生徒が学べるコースということになっています。B 以降は徹底した外国語教育ということで、とにかく自分の到達点になる言語を B の段階ではだいたい7、8年、Ab initio の段階ではだいたいゼロから2年までの習得ということになっています。日本語の中でも当然 A1、A2、B、Ab initio というのがありまして、A1 というのは恐らく国語教育を受けた人たちも取れるようなレベルであると考えられます。今インターナショナルスクールで多く用いられているのが、たぶん A2 ではないかと思うのですが、これからの問題といたしましては、今日本語を話しながらも決して母国語であるという認識が持てないような生徒、つまり第二言語としての日本語を話す生徒が例えばこういう International Baccalau-reate のような資格を持っていることにより、日本の中でどのような位置づけをされるかということが最大の関心ではないかと思えます。

日本語のおかれている環境

それに関連して日本語のおかれている環境なのですが、今申し上げましたのは第二言語として日本語を勉強している生徒のことでしたが、外国人といいましても全て英語が分かる人ではありません。彼らは一人一人のアイデンティティーを日本社会で打ち出したい、という意志がありますが一般社会の人はあまり理解してくれないのではないかと、ということを必ず9月のある時期に生徒からいわれます。それはどこそこの国から来た、特に外見的にヨーロッパの出身だということが分かる場合にはだいたいの場合、日本人は最初は英語で話しかけてくるのが多くて、日本語を使ってみたいと思っても、相手は未熟な日本語と長いことつき合う忍耐力がないのではないかというクレームです。それから例えば外国語として日本語を学ぶこと、日本語を話していても第二言語として学んだ人たちがこれから日本の中でどのように機能していくか、ということが私たちの大きな関心ではないかと思えます。

西川 どうもありがとうございました。続きまして今泉さんより、中国帰国生徒の言語教育についてお話していただきます。

表 母語別内訳総数

言語		話者総数(%)		言語		話者総数(%)		
英語		2,572 (57.9)		オランダ語		31 (0.7)		
日本語		1,687 (38.0)		スペイン語		27 (0.6)		
中国語		87 (2.0)		スウェーデン語		26 (0.6)		
韓国語		64 (1.4)		そ	ポルトガル語	16 (0.4)		
フランス語		41 (0.9)		の	イタリア語	13 (0.3)		
ドイツ語		26 (0.6)		他	デンマーク語	13 (0.3)		
その 他の ア ジ ア ・ ア フ リ カ 系 言 語	インド語*	39	(0.9)	の	ロシア語	9 (0.2)		
	インド	ウルドゥー語	25	(0.5)	欧	ノルウェー語	9 (0.2)	
	ン	ヒンディ語	18	(0.4)	米	フィンランド語	9 (0.2)	
	ド	ベンガル語	17	(0.4)	系	ポーランド語	8 (0.2)	
	系	グジュラティ語	16	(0.4)	言	ハンガリー語	6 (0.6)	
	言	タミール語	8	(0.2)	語	ブルガリア語	4 (0.4)	
	語	シンハラ語	3	(0.0)	181 人	クロアチア語	4 (0.4)	
	132	テルグ語	2	(0.0)		スイス＝ジャーマン語	4 (0.4)	
	人	マラチ語	2	(0.0)		ルーマニア語	4 (0.4)	
	ア	パンジャブ語	1	(0.0)		アフリカーンス語	3 (0.1)	
	フ	シンディー語	1	(0.0)		フレミッシュ語	1 (0.0)	
	リ	タガログ語	28	(0.6)		ギリシア語	1 (0.0)	
	カ	タイ語	22	(0.5)		スロバキア語	1 (0.0)	
系	マレー語	22	(0.5)	マケドニア語		1 (0.0)		
言	ヘブライ語	13	(0.3)	日本語と英語のバイリンガル		455 (10.2)		
語	アラビア語	11	(0.2)	日本語と他言語のバイリンガル		30 (0.6)		
246	ベルシア語	9	(0.2)	その他のバイリンガル		89 (0.9)		
人	チャモロ語	4	(0.0)	日本語、英語と他とのバイリンガル		21 (0.5)		
	ナイジェリア語	1	(0.0)					
	クウェート語	1	(0.0)					
	スワヒリ語	1	(0.0)					
	セスワナ語	1	(0.0)					
	チチェワ語	1	(0.0)					

注1 「英語」、「日本語」、「中国語」、「韓国語」、「フランス語」、「ドイツ語」の欄の数字はのべ人数、それ以外の欄の数字は異なり人数。

注2 *は、回答に記入してあり、そのまま記載した。正式には言語の名称ではないが、回答は無記名であったので、確認が不可能であった。